

佐賀県の焼物について

講師 佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長

すずた ゆきお
鈴田 由紀夫 氏

本年度第2回の「郷土研究講座」(県立図書館主催:年間4回開催)は、武雄市立武雄中学校において開催しました。これは、第1学年の総合学習である「オンラインワン事業」に組み込まれた授業の一環であるため、受講者も同校の1年生全員とその関係者のみに限定して実施しました。同校では1年生が12月に佐賀県立九州陶磁文化館を社会見学することが計画されていたため、九州陶磁文化館学芸課長の鈴田由紀夫氏に講師をお願いして、陶磁器の歴史と文化について生徒たちに分かり易く講演して頂きました。

講演は、まず、各クラスの生徒代表が持参した茶碗を手にとって、その生徒との対話を交えながら、それはどこの焼物であるか、陶器と磁器はどう違うのか、またそれを見分けるにはどうすればいいのか、といったことから入っていかれました。そして、陶器と磁器とでは原料そのものが異なっていること。両者の違いは茶碗の底を見れば分かること。茶色なら粘土で作った陶器で、白ければ陶石を砕いた土で作った磁器であること。といった初歩的な解説を加えながら話を進めていかれました。このように、生徒たちに焼物への興味と関心を持たせるところから、講演は始まりました。

次いで、講師自らがパワーポイントで作成したスライドを液晶プロジェクターでスクリーンに映し出しながら、以下の三分野に分けて、説明がありました。

① 「佐賀の陶磁器の歴史」

最初は、九州陶磁文化館の各室に展示されてある江戸時代からの陶磁器の紹介があり、歴史と制作方法などについての説明がありました。この中では、陶磁器の原料である粘土等の質の違いや、窯で焼く前と後では色や大きさが異なること、また、ヨーロッパに輸出された陶磁器が、当地で金具を付けて使用されていた様子などがスライドで示されました。

② 「焼物の名称の由来」

続いて、伊万里焼と唐津焼を例に取りながら、その名の由来についての説明がありました。有田焼のように、現在は制作地の名で呼ばれるのが普通であるが、江戸時代においては、積出港の名前がそのまま焼物名になっていたこと。従って、武雄の焼物の歴史は古いのにも、武雄焼とは呼ばれなかったことなどの話がありました。

③ 「武雄の焼物の特徴」

最後に、江戸時代の古地図を示しながら、武雄は四百年も前から至る所で盛んに焼物が作られていたことの説明や、黒牟田、西川登などの窯跡の紹介、そして、焦げ茶色の粘土に白い化粧土を塗った後に、櫛で繊細な模様をつける武雄の焼物の特徴などを詳しく語られました。生徒たちに、自分の郷土が深い伝統を持った焼物文化を有しているかを教えたい、という気持が伝わってくる話でした。

講演後に、生徒代表からの謝辞があつて、熱心な聴講のうちに、今回の、総合学習を兼ねた講演会を終了しました。
(文責:県立図書館)

